

連載

挑戦

～県農業試験場の
プロジェクトX～ ⑦



スカイベリー誕生秘話 (3)

生産者編 江俣 伸一さん (鹿沼市)

いちご王国とちぎ。長年日本一の座を守っているが、九州勢の激しい攻勢を受け、予断を許さぬ戦国時代に突入した。

何としても王座を守り抜くために新品種を生み出さねばならない。県農業試験場いちご研究所の研究スタッフは幾多の苦難を乗り越えてついに新品種・スカイベリーの育成に成功した。栽培農家の実証栽培も良好で、26年からは一般栽培に入った。期待の星は順調に育ち、現在栽培されている27年産の栽培農家は184戸、面積12・2ヘクタールと前年に比べ2倍に増えた。贈答品を中心としてブランド力も着々とアップし、流通市場は首都圏から仙台、盛岡へと拡大した。

贈答品中心にブランド力アップ



栽培農家・面積とも倍増

「大粒で色艶いろつやが良くてずば抜けた品種。今まで見たことがないようないちごでした。遠目に見ても、これまでのものとは明らかに違いました」

鹿沼市のいちご栽培農家、江俣伸一さんは、スカイベリーを初めて収穫した時の印象を語る。

江俣さんがスカイベリーの試験栽培を始めたのは、二十二年九月七日だった。上都賀農業振興事務所を通して県農業試験場いちご研究所の研究員が訪れ、スカイベリー三十株を定植した。江俣さん一家は代々いちご栽培農家、初めての品種なので、これまでのノウハウを生かしながら慎重に育てた。

そして十一月下旬、収穫の時を迎えた時、スカイベリーは見事なオーラを放っていた。「これはすごい」と手ごたえを感じた。品種が違ってもちこの作り



江俣伸一さん

方はだいたい分かる。だが、いちご栽培農家にとって、最も大切な採算ベースは、作って見ないと分からないかった。

「挑戦しないと物事は進まない。これまでも試行錯誤しながら生きてきました。まず、リスクの範囲内で作ってみようと思いました」。

この頃、県の方針も「とちおとめはブランド力が安定した本県の大黒柱。さらにスカイベリーを贈答品中心に福岡県産いちごに対抗できる品種に育てる」と決まった。

そこで江俣さんは翌二十三年、現地試験の栽培面積を二・五アール（二百五十平方メートル）に広げた。



スカイベリーを箱詰めする江保伸一さんと妻・敦子さん

寒くなる前までは良かったが、十二月・一月の厳寒期になると北向きに植えられている株に色むらが出てきた。どの品種も多少こうした傾向があるので経験を生かして対応した。

一年に一作なので、植え直しができない。品種にあった栽培法を確立するには、どうしても何年もかかってしまう。そこで、育てながら細かい部分を改善していった。そして翌

年、体験・観察したことを生かした。「良い所を見つけて、そこを伸ばしていくために、ハウスの環境を合わせていきましました。こうすると良いだろうな」と思ったことがあっても、それを実行できるのは次の年、一年待ちになってしまいます。そこが辛いところです」

スカイベリーは病気に強く、収量も多かった。これからは採算ベースに乗る。二十四年から実証栽培を開始した。二作目の経験から、厳寒期に対応して日当たりを良くするため二条植えから一条植えに変え、花房を南向きにした。これで色艶が良くなった。また、肥料が多いと果形が乱れるので、施肥のバランスをとった。甘みを出すため、果実の成熟期間を伸ばす温度管理に工夫を重ね、温度を均一に調節する循環扇も取り付け

た。

二十五年からの実証栽培では、スカイベリー専用ハウスを二棟新設、栽培面積を一気にこれまでの二倍の五アール（五百平方メートル）に拡大した。ハウスのサイドを自動開閉して換気する、とちおとめとは独立した換気センサー（感知器）を設置、これまでの三作の反省を生かして、果肉に傷がつかないように網目が太くて大きい果実マットを敷いた。

そして、二十六年九月から本格的な一般栽培を開始した。美味しくて、

大果で収量が多く、病気にも強い。生産者にとって魅力ある素晴らしい品種、スカイベリーは順調に育った。これまで試行錯誤しながら積み重ねてきた体験と工夫が実を結び、スカイベリーは、贈答品を中心として流通に売り込める段階になった。いちご経営における採算ベースの展望が開けてきた。

現地検討会で意見交換

いちご栽培は一人だけの力では難しい。生産者はそれぞれ勉強して



いるので、意見交換して良いものを取り入れていくチームプレーが大切だった。皆が体験した研究成果を持ち寄れば、何年もかかる栽培技術習得が短期間で済むメリットがあった。販売量を確保して流通に乗せていくためには、多勢で栽培し、品質と数をそろえて出荷する体制を整えていくことが至上命題だった。

江保さんは「上都賀



(左から) 石原良行・いちご研究所長、江俣伸一さん、水沼正好・上都賀農業振興事務所経営普及部部長補佐



二人三脚で大賞を受賞 いちご栽培は家族ぐるみ

農協スカイベリー（i27号）栽培研究会」の会長。二カ月に一回、スカイベリー現地検討会を開き、意見交換している。これには上都賀農業振興事務所の普及指導員と県いちご研究所の研究者も参加、いろいろな相談を受け、アドバイスしてきた。江俣さんは、スカイベリーに挑戦した想いを次のように振り返る。新しく始まる人もあるので、技術

的に生産者全員の足並みをそろえていく必要があると思いました。スカイベリーの一般栽培まで漕ぎつけ、ミッションを百パーセントとは言えないまでも達成できて嬉しいと思います。値段も新聞市況では上回ってきており、これも励みになっていきます。中でもスカイベリーを食べた人が「おいしい」と言ってくれた時は特に嬉しくて、疲れが吹き飛びます。

実績を基に普及拡大

の協力が不可欠だ。江俣さんは育苗、定植から収穫、選果・選別など一年を通して作業全般にわたって妻・敦子さんと二人三脚でやってきた。昨年は「第八回いちご王国グランプリ」大賞を受賞した。江俣さんは「妻との共同作業で今日まで進んできました。この大賞はとちおとめで受けたものですが、なかなか取ろうとしても取れない賞なので感慨もひとしおです」と感謝の気持ちを話す。

手塩にかけて子供のように

まな工夫を重ねていましたね。『おかげさまで良いものが採れました』と言われると嬉しい。栽培農家と一体となって前に進んでいく気持ちが大切だと思います。他のいちご栽培農家もスカイベリーの成果を関心を持って見ており、江俣さんのように実績が上がれば、栽培の拡大、あるいは新たな取り組みを自信を持って進めていくことができます」と嬉しそうな表情を見せた。

上都賀農業振興事務所
で指導に当たってきた水沼正好・経営普及部部長補佐は「栽培農家の声を聞き一緒に考えながら支援してきました。スカイベリーの栽培ハウスで、温度データをとり、定期的にテイストして糖度を測り、温度管理や施肥など栽培全般にわたったりアドバイスしてきました。実証栽培の頃は人数も少なく大変だったと思いますが、江俣さんはさまざま

石原良行・いちご研究所長は「私達研究員は、いちごの新品種を開発して生産者の皆様のところへ届けます。そこからグループ勉強会など工夫して育てていただくことで、いちご産地・農家の活性化につながっています。研究所の開発によって新品种が生まれ、それが栽培農家の皆さんに育ててもらい、市場に流通して消費者へと届く。研究員にとっては、手塩にかけて育てた子供を世間に出したような気持ちで、本当に嬉しい」と笑顔で話してくれた。